

日常的にも、非日常的にも、すべての子どももの遊びを支える

千葉県●NPO法人しゃり

発達障害には、自閉症、アスペルガー症候群、その他の広汎性発達障害、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(AD/HD)などが含まれる。複数の障害が併発したり、症状のレベルもさまざまであることから、障害の種類を明確にすることは難しい。また、外見からはわかりづらい場合もあるため、周囲の理解が得られず、当事者やその家族が人知れず悩むことも多い。そうしたなか、NPO法人しゃりでは「心のバリアフリー」をめざし、障害児と健常児が交流し、相互理解を深めるための場所と活動を提供している。

世代を越えて紡がれていく「つながり」

NPO法人しゃり(以下、しゃり)の設立は、1980年に発足したサンシャインクラブがあったからこそといえる。同クラブは、現在、しゃりの理事のひとり、萩原豪人さん(36)が保育園を卒園する際、萩原さんの母親が、「卒園後も園や保護者同士のつながりを大切にしたい」と望んだことか

ら生まれた。同じ望みをもった保護者と子どもたちは、卒園後も同クラブが実施する野外キャンプやスキー合宿などで親交を深め、次第にその門戸は、千葉県市川市内の小中学生にまで広げられるようになった。同クラブでは、小中学生たちに体験活動を提供するだけではなく、地元の高中生や大学生をクラブスタッフとして登用し、企画・運営を任せることで、彼らの企画力や責任感を育てることに

も重きをおいた。そのクラブに、発足時から「卒園児」として参加していたのが、前述の萩原さん、同法人の理事長である大久保誠さん(35)、理事の佐藤孝之さん(36)である。10年ほどのときが流れ、高校生となった3人は、クラブスタッフとして活動に参加するようになる。この頃、同じくスタッフとして参加したのが、現在副理事長で当時高校生だった佐藤美江さん(37)だ。「サンシャイ

ンクラブでの活動は、何もかもが楽しくて仕方がなかったですね。高校在学中はもちろん、短大に進学してからもスタッフとして参加していました。そのうち、地域の子ども会やPTAから、レクリエーション活動の企画・運営を依頼され、『遊びの出前』をするようになったんです。それで、同世代の4人の間で、自分たちならではの組織をつくりたいとの思いが強まり、1999年、任意団体の『しゃり』をつくりました」。

現在のしゃりは、立ち上げ時の4人に加え、理事として新たに加わった岡本亜美さん(37)と、監事の中村沙織さん(29)の計6名で運営されているが、中村さんに至っては、小学生の頃にサンシャインクラブに参加していた経緯がある。つまり、立ち上げ時のメンバー4人とは、高校生スタッフと活動に参加する子どもの関係だった頃からの知り合いなのである。

親の世代が立ち上げたサンシャインクラブ。そこに参加していた小学生たちが成長し、立ち上げたしゃり。そして現在、しゃりが実施するさまざまな活動には、すでに次の世代の小中学生が参加するようになっていく。

「楽しくなければ続かない」

「お寿司の『しゃり』のように、いろいろなネタ(遊び、イベント)をのせて社会に貢献していきたい」との思いから名づけられた「しゃり」は、サンシャインクラブと同様に、地元の高中生や大学生をスタッフとして登用した。しゃりによる『遊びの出前』は口コミで徐々に広がり、地域の子ども会や自治体などからのオファーは次第に増えていった。ある時は、地元の子ども会からの依頼で地域のお祭りを主催し、バザーの運営やゲームの進行などに携わった。またある時は、PTAが主催する行事に歌

遊びや体操のメニューを持ち込んだ。しゃりによる遊びの出前の内容は、対象となる子どもたち、あるいは、協力者となる組織がもつアイデアや技術によって臨機応変に変わる。

しゃりの活動実績が積み重なって、地元の子ども会の会長から、「一緒にキャンプができないだろうか」との相談があった。時を同じくして、発達障害児の親が組織する「にじの会」からも同様の相談を受けた。各組織の大人たちが集まり、健常児と障害児の合同キャンプの可能性について協議が重ねられた結果、「まずはやってみよう」ということに。当時のことを振り返りながら、佐藤さんは次のように話す。「協議の段階では、いろいろと懸案事項も出ました。でも、怖がっていたら何もできない。ですから『全員、命に別状なく帰ってくる』こと、これだけは守ろうということで行な

踏み切りました(笑)。

日程は2泊3日、場所は千葉県内のキャンプ施設。総勢約100名の参加者のうち5割が地元の高中生や大学生を含めたスタッフと保護者、4割が健常児で、1割が障害児だった。コミュニケーションや団体行動が苦手な発達障害児が、健常児と交流できるのかどうかを大人たちは危惧していたが、その心配は不要だった。「気にしているのは大人だけということがよくわかりました。子どもたちは特に意識することもなく、自然の流れのなかで一緒に遊べるんです」と佐藤さん。テントでの就寝をともし、協力し合いながら自炊をする。自然のなかで存分に遊び、キャンプファイヤーを楽しむ。障害児と健常児の合同キャンプという初の試みは大成功に終わり、その後も「ハートフルキャンプ」として毎年実施されている。2008年、しゃりは法人格を

取得し、「NPO法人しゃり」となった。組織存続の秘訣について佐藤さんは、「楽しくなければ続かない」、これがしゃりのモットーです。細かい規則などはありません。その時々で関わるさまざまな団体や組織の皆さんと手を取り合いながら、運営する側も、参加する側も、そこに関わる全員が『楽しい』と思えることしかしない(笑)。そこに尽きると思いますが」と話す。

遊びの出前に対するニーズの増加もさることながら、ハートフルキャンプの参加人数も年々増加し、9回目を迎えた2010年には計155名が参加。そのうち約4割を占めるボランティアスタッフの高校生や大学生は口コミで集まるという。キャンプ初日は緊張気味だった子どもたちが、最終日には満面の笑顔を見せるようになる。なかには、参加した小中学生との別れを惜しんで涙を見せる高校生や大学生の姿も見受けられ

個性を活かした組織力と地域への愛情が万人にやさしい地域をつくる

NPO法人しゃり副理事長 佐藤美江さん

6人からなるしゃりの運営スタッフは、一人ひとりの個性がうまい具合に活かされていると佐藤さんは話す。「大久保君は理事長らしく常に前向きで社交的。理事の萩原君は、臨床心理士の資格もあるうえ文才があるので、文章の作成は彼の仕事。同じく理事の佐藤君は、デジタル関係に強いので、ウェブサイト関係はすべて彼に任せています。同じく理事の岡本さんもまた、臨床心理士なので、保護者からの信頼も厚く、頼りになります。監事の中山さんは、彼女を子どもの頃から知っていることもあり、妹のような存在ですが、こまごまとしたことをフォローしてくれる欠かせない存在です」。佐藤さん自身は、助成金の申請、会計、事務など、もっぱら裏方の仕事向きなのだろう。しゃりっこベースキャンプのコーチのひとりである瀧野さんは、「佐藤さんには、地域を愛する心と地域で実現したい夢があります。これがしゃりの大きな原動力のひとつになっていると思います。10年後あるいは20年後に、この地域が全国で子育てをしたい地域ナンバー1になる可能性だってあります」と期待を寄せる。



「もっと大勢で、もっと楽しいことにチャレンジしたい」と話す佐藤さん

取材当日、保護者が迎えに来たにもかかわらず、しゃりっこベースキャンプから帰りがたらない子どもがいた。それだけ居心地がよく、楽しい証拠なのだろう。この光景は、しゃりが拠点を構える地域そのものが、住民にとっていかに居心地がよく楽しいかを表しているようにもみえた。

「ドリームズ・カム・トゥルーの歌詞に、『明日の種を蒔くのは今日なんだ』という一節があつて、私はその言葉が大好きなんです。この大好きな言葉の通り、これからも迷っている暇があつたら、次々と行動に移していきたいですね」と佐藤さん。今後のしゃりにどんなネタ（アイデア）がのつていくのが楽しみだ。

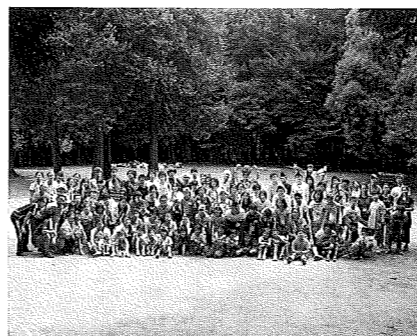
NPO法人しゃり概要

ホームページ: <http://shari310jp.com/>
 学童保育所しゃりっこベースキャンプ
 所在地: 千葉県市川市北国分3-21-13
 バプテスト北国分キリスト教会内
 TEL: 047-701-7852
 080-51175-4467

る。こうした笑顔や涙を目にする瞬間が、佐藤さんのやりがいにもつながっているようだ。

新たに始まった「しゃりっこベースキャンプ」

しゃりでは、2010年の夏より、新たな事業を開始した。健常児のみならず、発達障害のある児童の受け入れも行う学童保育所である。この事業を思い立った背景について、佐藤さんは「遊びの場前もハートフルキャンプも、限られた時間のなかでのこと。子ども



ハートフルキャンプ2010の様子



しゃりっこベースキャンプでゲームに興じる子どもたち

にとつての遊びは日常ですから、限られた時間のなかで、子どもたちにも成長や変化を期待するのは、大人の身勝手な考えなんです。だから、もっと日常に根ざした活動もしたいと思いました。また、発達に障害のあるお子さんたちの保護者のなかにも、放課後の数時間、日常的に子どもを預かってくれる場所があることを望む人はいるんじゃないかと。遊びの出前やハートフルキャンプが、子どもや大人にとつての非日常的な場所であるならば、この学童保育は日常的な

場所といえます。この日常的な場所が、非日常的な活動をするうえでのベースキャンプ（基地）のようになつてほしいとの願いを込めて、名前を「しゃりっこベースキャンプ」にしました」と話す。

しゃりっこベースキャンプは、現在、週2回（月・水）（2011年3月からは毎日）、下校時から19時までの時間帯で運営されている。夏休みなどの休校日は8〜19時まで。一時保育を1時間500円で利用することもできれば、1か月1万6000円の月単位で利用することもできる。場所はしゃりの事務所の向い側にある、バプテスト北国分キリスト教会の厚意により教会内の部屋が提供されている。コーチと呼ばれる計6人の指導員は、それぞれがさまざまなバックグラウンドをもつ地域住民だ。本稿の取材日に当番を務めていたのは、瀧野英一さん（64）と酒井幸孝さん（59）の2人で、とも

に市川市内の元小学校教諭だ。コーチになつた理由をうかがうと、2人は「子どもが好きだから、子どもから離れたくないんです」と笑顔で声をそろえた。コーチを務めるにあたり、瀧野さんは次のように話す。「私は遊びの先生として、文化としての遊びを伝えていきたいと思っています。教員時代には、思う存分はできなかったことですから、私自身も心から楽しんでいきます」。酒井さんは「子どもへの学習指導をマンツーマンに近いかたちで行えることに、やりがいを感じます。また、夢中で遊ぶ子どもの表情を間近で見られることはうれしいですね」と話す。そんなコーチ陣は、子どもたちのコーチであるとともに、佐藤さんを含めしゃりの運営メンバーにとつても、頼もしい相談相手なのだそう。佐藤さんの「しゃりを介してつながる人たちは、みんな家族のようなもの」との言葉通り、しゃ

りっこベースキャンプで遊ぶ子どもたち、コーチ陣、運営側の佐藤さんの間には、屈託のない笑顔があふれ、朗らかな笑い声が響く。

次なる挑戦は「おもちゃ図書館」

しゃりの設立から12年目の今

年、佐藤さんが掲げている第一の目標は、より多くの子どもたちにしゃりっこベースキャンプを利用してもらうこと。そして、新たに挑戦したいこととして、佐藤さんは「おもちゃ図書館」の運営をあげている。

「まだ、何も具体的には動き出していませんが、ニーズは絶対にあると思っています。それに、協力してくださる方もたくさんいらっしゃると思うんです。しゃりっこベースキャンプの時も、やりたいという思いを周囲に伝えたところ、

あつという間に30人くらいの協力者が集まってくれました。ニーズがあつて、人に恵まれていけば、きっとできると思うんです」と佐藤さんは意欲をみせる。ほかにも、未就学児の一時保育やプレパーク（冒険遊び場）事業についても検討中とのこと。